

第3章 富士吉田市の歴史文化の特性

第1節 富士吉田市の歴史文化

(1) 富士吉田市の歴史文化の特性

富士北麓に位置する本市は、富士山を中心に道志・御坂両山地に囲まれ、市内の山岳と森林の大部分が富士箱根伊豆国立公園の区域に含まれる良好な自然環境を有しています。本市の歴史は、そうした自然環境に育まれ、同時に幾度となく繰り返されてきた富士山の噴火活動による被害を受けながらも、暮らしを営んできた経緯によって、積み重ねられてきたものです。それらには、特徴的な歴史文化の様相が表れており、次に掲げる8つの項目に整理して考えることができます。

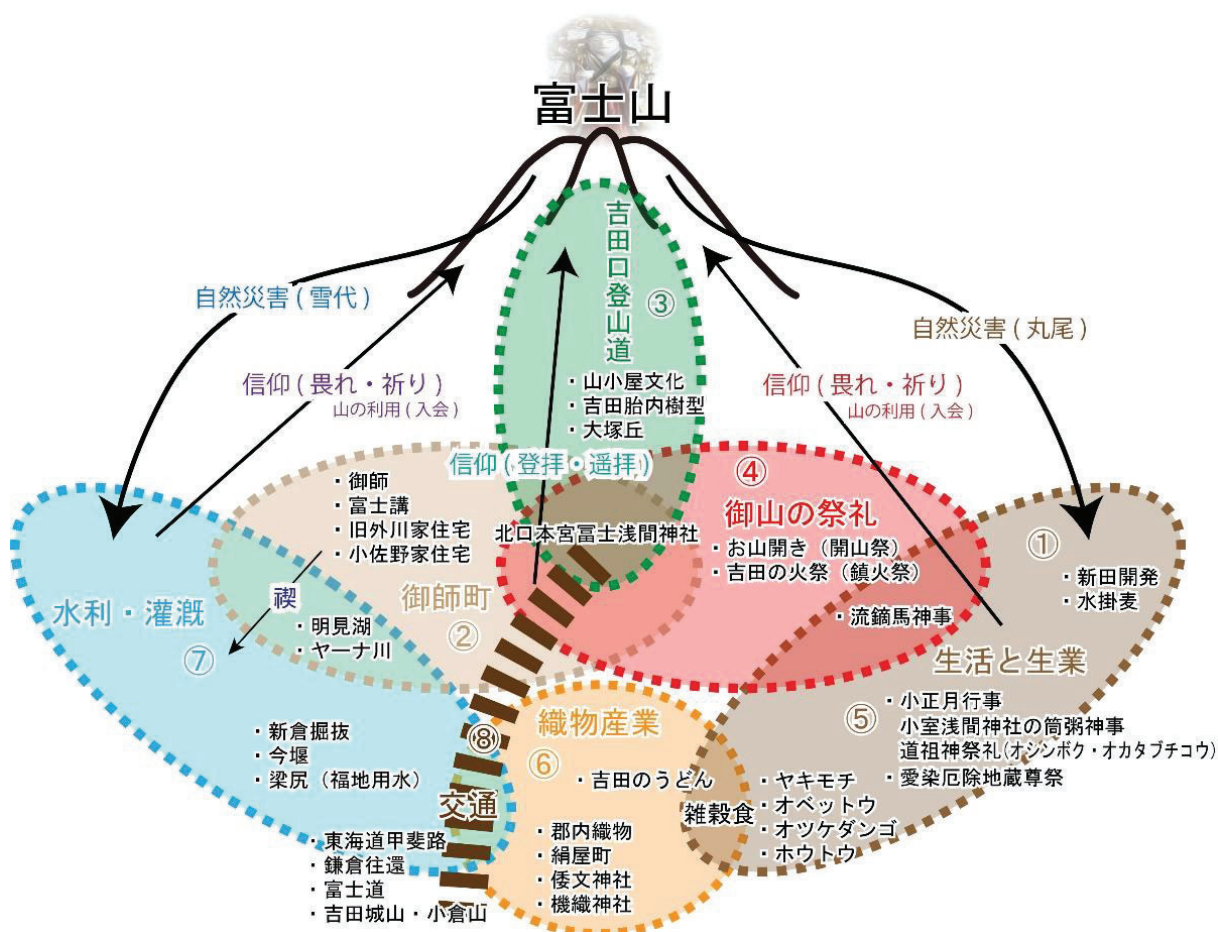


図3・1 富士吉田市の歴史文化の特性概念図

①富士山の噴火活動と人々の暮らし

本市に暮らす人々は、富士山の度重なる噴火活動の直接的な影響を受けながら生活してきました。人々が火山活動によりもたらされた地形を工夫や努力によって利用してきた歴史は、本市の歴史文化の基盤を形成しました。

②北口本宮富士浅間神社と御師町が育んだ巡礼文化

古くから神聖視された富士山は、信仰の対象として人々を魅了してきました。富士山に対する信仰が遙拝から登山に変化した近世には、自宅を宿泊所として提供する御師と呼ばれる者が現れました。特に上吉田地区は北口本宮富士浅間神社を中心とした御師町として発展しました。

③富士山吉田口登山道が支える日本固有の信仰形態

富士山と麓の御師町をつなぐ道として、吉田口登山道は古来、多くの信仰登山者によって利用されてきました。近世には登山の盛況によって登山道の各所に祠堂や山小屋のほか、石造物が建てられました。現在の登山道でもかつての信仰の歴史を感じることができます。

④聖地富士山を守り継ぐ吉田の祭礼

富士山は畏敬と祈りの対象とされたため、本市では富士山に関連する祭礼行事が古来行われてきました。特に富士山の山開きと山仕舞いを告げる神事は、本市の歴史文化を語る上で欠かすことのできない行事です。

⑤豊かな自然環境に守り育てられた人々の暮らしと祭り

本市の人々は、富士山によりもたらされた山の恵みを享受しながら生活してきました。人々は農業に適さない本市の土壌を活かした農作物をつくり、日々の暮らしをより豊かにするために知恵と努力を積み重ね、暮らしに根差した祭礼文化を生み出しました。

⑥環境に支えられた織物産業と風情ある町並み

本市は、農業に適さない土壌であったため、近世には織物産業が盛んに行われました。織物産業の中心として栄えた下吉田地区では、かつて問屋街として栄えた町並みが残されています。

⑦信仰、暮らしと産業を支える水

本市は古くから水の豊かな土地であり、富士山の湧水は人々の暮らしや産業を支えました。しかし富士山の山腹から流れ出た雪代による災害に見舞われるなど、本市には水による自然災害と戦ってきた歴史があります。

⑧内に結ばれ、外に開かれた山麓のまち

本市は四方を山に囲まれた場所に位置していますが、東海道本道と甲斐国を結ぶ「甲斐路」や「富士道」といった主要な道をつなぐ結節点でした。そのため市内の主要な道路沿いには町が発展し、政治や軍事拠点が形成されました。

①富士山の噴火活動と人々の暮らし

富士山は、約10万年にわたって幾度も噴火を繰り返してきた山であったことから、富士山に隣接する本市は、溶岩流や火砕流、火山灰といった火山活動の影響を直接的に受けてきました。市内にはそのような火山活動によって生み出された天然記念物である雁ノ穴や、富士山世界文化遺産の構成資産でもある吉田胎内樹型を見ることができます。

上中丸遺跡^{かみくれ ちしん やしき いせき}や上暮地新屋敷遺跡^{かみくれ ちしん やしき いせき}の発掘調査では、縄文時代中期に起きた富士山の噴火により降り積もった火山灰の層を確認することができます。市内各地の発掘調査から、当時の人々は噴火災害から逃れた後、しばらくすると再び同じ土地に住んだことがわかっています。こうしたことから、人々が厳しい環境下で生活していたことを窺い知ることができます。本市に住む人々は、噴火による被害を巧みに避けながら暮らしを営み、自然と闘いながら、水を求め、山野の産物を利用して暮らしを営んできました。

近世になると山裾にあった村々は溶岩台地に集落や耕作地を求めるようになります。しかしながら、本市の土壌は火山性の土壌であるため透水性が高く、雨水をため込むことができない特徴を持つことから、用水の整備が必要となりました。そこで水を必要とする地域に水を送るため、新倉堀抜などの灌漑水利の大規模工事が行われ、農地等の生産性の向上が図られました。

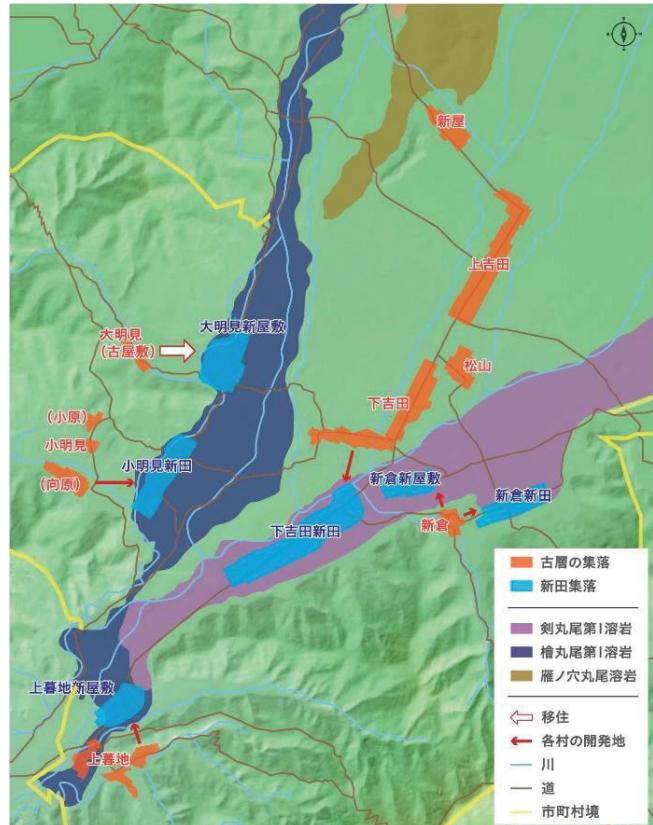


図3・2 富士吉田市の近世新田集落の展開

②北口本宮富士浅間神社と御師町が育んだ巡礼文化

古来、人々は富士山の秀麗な山容に神聖さを感じ、また、噴火を繰り返して災害をもたらすものとして畏れ崇めてきました。富士山を信仰する原初的な人々は、麓から山を拝む、遥拝信仰であったと考えられます。北口本宮富士浅間神社の前身でもあったとされる^{おつかやま}大塚丘は、日本武尊が東征のときに富士山を遥拝したとされています。平安時代末期に富士山の噴火活動が沈静化すると、修行僧などの限られた人々が山中において修行を目的とする場所へと変化していきます。室町時代には、^{はせがわかくぎょう}長谷川角行という人物によって富士山信仰と呼ばれる独自の教えがまとめられ、一般の参詣登山者（道者）が富士山に登るようになり、



図3・3 北口本宮富士浅間神社

近世になると富士山信仰の教義がさらに民衆に広まり、富士講として隆盛を迎えました。その富士講では、富士山の登山道として吉田口登山道が本道として定められたことから、江戸や関東一円から多くの富士講信者が本市を訪れるようになりました。そのような背景もあり本市には「御師」とよばれる人々が現れ、信仰登山者に対して自宅を宿坊として提供し、食事や参詣、祈祷などの世話をしていました。上吉田地区は、御師住宅と呼ばれる宿坊が最盛期に86軒を超え、富士山信仰の登拝拠点として発展しました。御師住宅については、世界文化遺産の構成資産でもある旧外川家住宅や小佐野家住宅のほか、上吉田地区には富士山信仰が隆盛していた当時の町並みを現在も見ることができます。



図3・4 旧外川家住宅

③富士山吉田口登山道が支える日本固有の信仰形態

現在の富士登山は、観光としての側面を持ちますが、元来富士山は、神仏の住む霊山とされ、信仰のために登る山でありました。その拠点とされたのが、世界文化遺産の富士山域の構成要素である吉田口登山道です。麓から道が途切れることなく、現在も歩いて富士山山頂まで登ることができます。吉田口登山道内には随所に富士山に登頂した記念碑（石造物）が設置され、今でも信仰登山が隆盛した時代の様子をうかがい知ることができます。

吉田口登山道における固有の信仰形態の1つに天然記念物、世界文化遺産の構成資産である吉田胎内樹型があります。吉田胎内樹型は人体の内部を彷彿とさせることから、富士講の登山者は穴の中に入って出てくることで生まれ変わり、身が清められると信じてきました。現在、御師を先祖に持つメンバーらによって構成される富士山北口御師団が、毎年4月に吉田胎内祭でお焚き上げを行っており、今も富士山信仰の儀式を目にすることができます。

また、2つ目として吉田口登山道における山小屋文化が挙げられます。富士山への信仰登山が盛んになると三合目の三社宮^{さんしゃぐう}など山中の随所に神仏を祀る祠堂が建立されるようになりました。登山者が祈りをささげるために足を止めた場所には、のちに休息所が整備され、最終的に山小屋へと変わっていったとされ、山小屋の多くは、神仏を祀る祠堂に隣接するように建築されていきました。現在伝わっている仏像・神像のなかには、修験者や講中の道者などにより山小屋に奉納・安置されたものが多く、登山道沿いにある山小屋は富士山信仰を支える重要な存在となりました。

八合目

本八合目：元祖室

本八合目：トモエ館

本八合目：富士山ホテル

本八合目：白雲荘

七合目：東洋館

七合目：トモエ館

七合目：日の出館

七合目：花小屋

六合目：雲海荘別館（六小屋）

五合目：星観荘

六合目ホテル跡裏の石碑

吉田ルート

須賀ルード

九合目 [3,580m]

御来光館 [3,450m]

八合目 [3,400m]

本八合目トモエ館 [3,400m]

本八合目 富士山ホテル

元祖室

八合目 [3,100m]

東洋館

鳥居荘

富士一館

鎌岩館

七合目トモエ館

日の出館

七合目 [2,700m]

七合目 花小屋

六合目 [2,390m]

386.1

里見平★星観荘

佐藤小屋

吉田口五合目 [2,400m]

御座石浅間神社

四合目 [2,010m]

三合目

3-6

④聖地富士山を守り継ぐ吉田の祭礼

修行者や富士講の人々にとって、富士山は修行の場であり、現世利益を求めて参拝する対象である一方で、富士山は畏れ、祈りを捧げる対象でありました。山梨県側の御山開きは毎年7月1日であり、その前夜祭として北口本宮富士浅間神社では、境内にある吉田口登山道の起点となる登山門で御山開きの神事が行われます。



図3・6 御山開き

また、8月26日、8月27日には、国指定重要無形民俗文化財であり、日本三奇祭の1つとされている吉田の火祭が行われます。現在は北口本宮富士浅間神社と諏訪神社の両社のお祭りとされており、元来は境内に鎮座している上吉田村の産土神であった諏訪神社の祭礼でありました。このことから、富士山信仰の隆盛により北口本宮富士浅間神社が拡大し、諏訪神社は北口本宮富士浅間神社の摂社となった歴史的な背景を知ることができます。この祭礼は約400年以上前から続くものであることが分かっており、聖地富士山を鎮め守る祭礼が、今でも人々の間で受け継がれています。



図3・7 吉田の火祭

⑤豊かな自然環境に守り育てられた人々の暮らしと祭り

本市で営まれた生活は、富士山と切り離して考えることができません。人々は絶えず富士山の影響を受けながら生活してきました。富士山により生み出された広大な裾野や森林から食料や生活物資といった山の豊かな恵みがもたらされました。

富士山に起因する環境は稲作には適せず、厳しい暮らしを強いられ、人々は織物や本市の地形を活かした農作物の生産などを行ってきました。同時に、人々の生活に深く根ざした独特な祭礼・行事を受け継いで、日常生活の平穏、家族の健康、農業の豊作、商売の繁盛などを神仏に祈願し、日々の暮らしをより豊かにするために知恵と努力を積み重ねてきました。

食文化に関しては、本市は火山灰地で土壌は痩せ、気温も低く農耕に適していなかったため、人々は暮らしの糧を集落の背後に広がる里山や森から得るとともに、稲作に適した土地柄ではなかったため、麦・粟・稗・蕎麦・トウモロコシなどを栽培する畑作地が中心でありました。そのため、麦などの雑穀類を粉にし、水でこね、汁の中に野菜と一緒に煮込んで食べるオベツトウなどと呼ばれる粉食がありました。

祭礼に関しては、各地区において小正月行事や祭礼、年中行事が実施されているほか、各地区内には民間信仰として庚申や二十^{こうしん}三^{にじゅうさん}夜といった講が建立したとされる石造物が数多く残されています。このような講は地域内における活動の中で生まれたコミュニティであり、近世から伝え

られているものがほとんどです。市指定無形民俗文化財である向原下組^{したぐみ}の道祖神祭、向原上組^{うへぐみ}の道祖神祭などに代表されるように地域独自の文化が生み出されました。

⑥環境に支えられた織物産業と風情ある町並み

富士山北麓に位置する本市は、高冷地であり、かつ火山灰の厚く堆積した土地では農業生産という面で厳しい環境であったことから、この地域の人々は農業生産を補うための手段として織物を始めたとされています。郡内地方（山梨県東部地域）の機織りが記録に現れるのは、江戸時代初期のことで、当時この地域を治めていた領主の秋元氏によって織物の生産が奨励され、発展したとされています。その後、他地域の織物産地との差別化を図るため、様々な技術を磨き、高級織物の産地として知られるようになりました。江戸時代になると家内副業的な規模で出発した郡内織物は、大正時代になると豊富な湧水や水を利用した電力織機の導入により、大量生産が可能になりました。その後、製品開発と設備の充実を図りながら生産量を伸ばし、全国的な産地として定着しました。国登録有形文化財の高尾家住宅主屋（絹屋町織物市場）がある下吉田地区を中心として商業地が形成され、下吉田月江寺の門前は、町として大きく発展を遂げました。現在、織物の問屋街として栄えた繁華街の様子は下吉田の西裏地区に残された建造物などからうかがうことができます。



図3・8 現代の織機



図3・9 絹屋町の町並み

⑦信仰、暮らしと産業を支える水

本市は、古くから水の豊かな地として知られています。富士山の噴火活動が盛んだった時代には、山麓に多くの湖が形成されました。湖は重要な水源として人々の暮らしや産業を支え、富士山信仰における水垢離場^{みずごりば}となりました。しかし、火山灰土や透水性の溶岩台地であることから農作物の栽培には適していなかったため、近世以降、台地の開発が始まりました。代表的なものとして、谷村藩第三代藩主であった秋元但馬守喬知^{たじまのかみたかとも}は新倉掘^{いまいぜき}抜、今井堰の工事を行ったとされます。



図3・10 福地用水(新屋)

また、本市には富士山の融雪洪水が、勢いを増して山麓の火山性扇状地を掘り込んで凹地となり、沢が形成された雪代堀があります。代表的な堀は、富士川砂堀（滝沢堀）、儘堀・村間堀（現在の間堀川）、神田堀（現在の神田堀川）、大堀・西堀（現在の宮川）です。本市は、古来繰り返し雪代災害に見舞われたため、町を守るために昔から堀を深く浚渫して整備する治水事業が行われていました。大明見村では、桂川の河岸に沿い約730mにわたって、このような雪代から村を守るため、土や礫を盛った雪代よけの中沢堤と呼ばれる堤防が築かれており、この堤防を現在でも見ることができます。このように先人たちは様々な対策を講じ、雪代という災害から地域を守ってきました。



図3・11 中沢堤



図3・11 中沢堤

⑧内に結ばれ、外に開かれた山麓のまち

本市は富士山をはじめとして四方を山に囲まれており、古代からの主要な交通網は東海道本道と甲斐国を結ぶ甲斐路（鎌倉往還）でした。また、近世になると甲州道中大月宿から分岐して上吉田を結ぶ富士道も重要な街道として使用されてきました。

また、本市は甲斐と駿河・伊豆を結ぶ街道沿いに位置する町でもあったことから、特に中世には、北条氏や今川氏が侵攻し、戦乱に巻き込まれた歴史を持ちます。

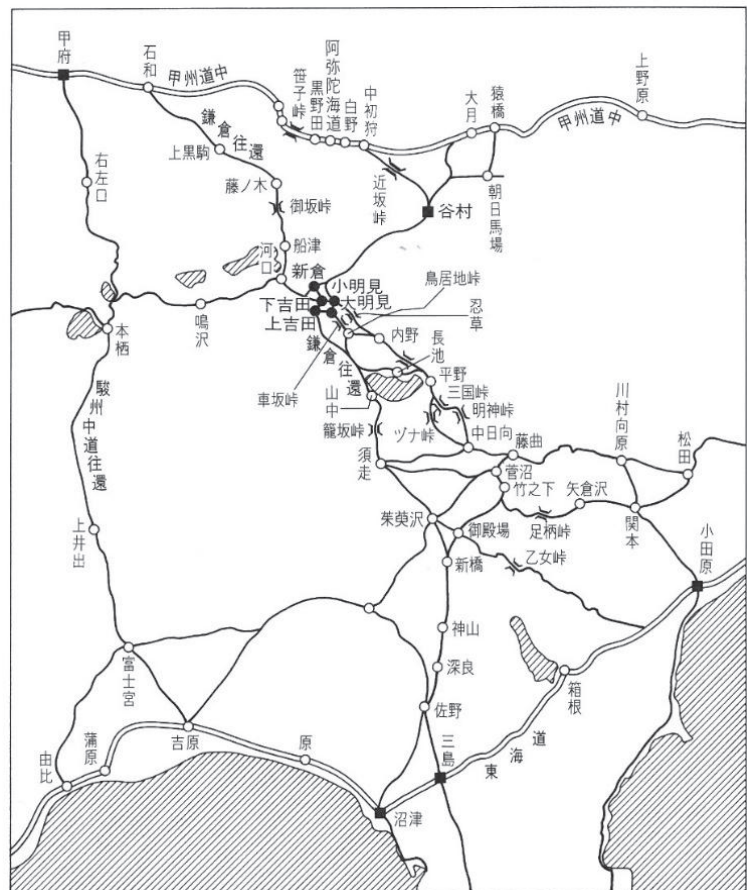
特に富士道に関しては、富士山信仰の隆盛に伴い、富士山登拝の道として、江戸などから道者や様々な物資が往来する道として活発に利用されていました。

近世において百姓町であったと記録されている下吉田地区は、郡内の中心であった谷村、相模・伊豆の各方面の物資の中継地として、さらには富士山信仰の拠点でもあった上吉田地区との経済流通の結節点としての役割も担いました。このような人や物質の往来によって現在の本市の市街地の原形が形成されていきました。



出典：『富士吉田市史』通史編第2巻(近世)

図3・12 富士山麓の近世交通体系



出典:『富士吉田市史』通史編第2卷(近世)

図3・12 富士山麓の近世交通体系